

## 履歴

カール・ハウスホーファーは 1869 年、ミュンヘンで生まれ、1908 年 10 月にドイツを出て、京都で軍事オブザーバーとして 1 年ほど働いた。明治天皇や桂太郎、後藤新平、寺内正毅陸軍大臣、奥保鞏参など日本のリーダー達と交流し、1910 年 7 月に帰国した。帰国後、最初の本（『Dai Nihon』）を出し、ミュンヘン大学から博士号を受けた。母校で地理学の教員になり予備役軍人として年金で生活していた。彼は 1924 年から 20 年間「Zeitschrift für Geopolitik」という学術雑誌を出版し、約 40 冊の本を出し、数百編の論文や書評などを書いた。著作の半分ぐらいは日本や太平洋に関係するものだった。

## ナチスとの関係

ハウスホーファーは 1919 年からルドルフ・ヘッスの友人だった。ヘッスは 1933 年にナチ党の副党首になって、その仲の良さはナチ時代に有名だった。ヒトラーの外交政策アドバイザーであるヨアヒム・フォン・リッベントロップは 1935 年から日本陸軍の大使館付武官、大島浩と接触した。結果は 1936 年の日独防共協定として実った。1939 年、リッベントロップは独ソ不可侵協定も交渉した。ヒトラーから見ると、外交政策的に一番大切な事は反ユダヤ主義と反共産主義であった。彼の考えによれば、日本人はアーリア人より劣った民族だったので、日独同盟の内容は空虚なものに成った。

## ハウスホーファーの理論

。。

## 日本にあたる影響

ハウスホーファーは日本で知日派外国人の一人として認知されていた。1930 年代、東京と京都で、二つの対立する理論が出現した。東京学派の中心は太平洋協会と日本地政学協会だった。両協会は当時の西欧の理論を広く受容した。彼らの出版した本の中にはハウスホーファーの『太平洋地政学』とその注釈本も含まれている。京都学派は小牧實繁の影響下にあった。小牧教授は 1938 年に皇道主義的な地政学を打ち立てた。しばしば神道の神話をバックに、科学性を無視した議論をしていた。メンバーは 1939 年から終戦まで毎週に集まって、地政学について議論した。参謀本部が密接に協力したのは間違いないと思う。

## まとめ

1930、40 年代のドイツや日本のリーダー達の中にはハウスホーファーの理論を知っていた人が多数いた。日独同盟を望んだ政治家、軍人、学者達は地政学に強い関心を持っていた。問題は、

日独同盟がハウスホーファーの理論の一部分だけを取り上げた事だった。彼のペット・プロジェクトは日独ソ大陸ブロックだった。三国の協力のみが、国際秩序に変化を与える可能性を持っていたのである。